新刊紹介

日本佛教史の研究　大屋德城著

大屋氏の論文集で、全部三卷から成る豫定で、第二卷は天台眞言の平安佛教に關するもの、第三卷は禪淨土等の鎌倉佛教に關するものを收める豫定であつたが、氏は先日逝去してしまはれた。望むらくは、第二三卷も原稿は有る筈であるから、續いて刊行せられ度いものである。第一卷の目次左の如し。

第一編大陸の佛教と飛鳥寧樂朝の佛教（一、飛鳥朝の佛教とその源流。二、南北朝佛教と飛鳥朝佛教との連鎖。三、文化史上に於ける法隆寺の地位。四、上代の造像に於ける個性の問題。五、唐朝の佛教と寧樂朝の佛教。六、涅槃經疏の日本傳來に就て。七、文化東漸のいろ〳〵）。第二編平安朝及び其の他（一、日本に於ける金光明經及び最勝王經。二、日本國譯經沙門靈仙に關する新史料。三、靈仙と其の後の史料。四、春日板雕造攷。五、印佛印塔攷。六、春日の神鹿に對する中世貴族の信仰。七、實範及び其の思想。八、因明の集成家藏俊。九、宋版一切經の請來と奢然及重源）。第三編鎌倉時代（一、日本に於ける佛教史家の先驅並に其の著書。二、興福寺北圓堂の再興に關する新史料。三、鎌倉初期の淨土教傳播と俊乘坊重源。四、觀心覺夢鈔は良遍が作たる確證。五、鎌倉時代の彌勒信仰。六、佛教史家としての凝然の態度に關する研究）。第四編南北朝以後（一、中世關東の文化と戒壇院派の律僧。二、室町時代の華嚴學者。三、多聞院日記より觀たる安土桃山時代の佛教。四、元祿時代南都東大寺の造營）。因に四六版五〇〇頁、價參圓半。京都市上京下鴨泉川町、東方文獻刊行會。

東方言語史叢考　文學博士　新村出著

言語學の權威新村博士の論文集である。序に曰く本書の收むる所は「予が國語の歷史的研究と國語及び東方諸民族の言語の比較研究とのさゝやかなる業績を主とし、かつ此種の研究についての方法論をはじめ、傍らこのがはの資料の解說と先賢の顯彰とに及べるものなり。就中言語の比較研究にして、著者が批判辯難に力を盡しゝ所頗る多し、國語の事相に涉りては、殊に音聲變化の考證に重きをおき、なほ方言の記載語辭法の說明のほか附するに國字國語の問題に對する一家言と古史談とを以てせり」と。內容目次次の如し。

一、國語及び朝鮮語の數詞について。二、朝鮮司譯院目滿蒙語學書斷簡解說。三、高橋景保の滿蒙語學。四、蒙洲語學史料斷片補遺。五、長崎唐通事の滿洲語學。六、本邦滿洲語學史料斷片。七、日本語かアイヌ語か。八、蝦夷に關する古歌。九、日本人と南洋人。一〇、琉球語の波行音の變遷。一一、田口博士の言語に關する所論を讀む。一二、田口博士に答へて言語學の立脚地を明にす。一三、國語系統の問題。一四、言語の比較研究に

就きて。一五、國語に於ける東國方言の地位。一六、東國方言沿革考。一七、足利時代の言語に就いて。一八、語學涓滴。一九、方言の調べ方に關する注意。二〇、總主論。二一、詞の八衢百年記念。二二、音韻史上より見たるカクワの混同。二三、音韻變化作用の消長。二四、音韻變化の諸原因。二五、音韻調査報告書に就きて伊澤修二氏に與ふ。二六、言語教授上聲音學の價値。二七、國語上の規範を論ず。二八、國語問題今昔談。二九、國字の將來。三〇、歐洲に於ける國語競爭。三一、ヤコブグリム。三二、イエスペルセン氏言語進歩論抄。三三、ロイマン教授自筆傳の一節。三四、佛國言語學界の近況(以上)。菊版七五四頁、價六圓。東京神田南神保町、岩波書店刊。

涼堂反故　一柳涼堂遺著

一柳知成の祖考涼堂翁(諱は義成)の遺著で、嘗つて「眞宗安心手鑑」と題して刊行した事のあるものであるが。此處に翁の五十回の忌辰に際し再び刊したものである。内容は「のりのいとぐち」から「ある人にしめす文」まで十六章。及び「成就の文」「言南無者の御釋」の二章から成る。各章とも簡單明瞭に眞宗安心を說いたものである。聞法の士に一讀を勸む。菊版和裝九十頁。非賣品。名古屋市西區押切町五丁目、一柳知成刊行。

神の認識　手島文蒼著

著者の宗教、歷史、藝術に就いての新舊論稿十三篇を輯めしもの、第一篇宗教論に、救濟教と解脫教、無明原理論、神の認識、第二篇佛教史傳に、玄奘三藏の因明學、日鮮佛教交通史考聖德太子と日本文化、第三篇藝術雜纂に印度の宗教藝術、藝術の作家を評家、藝術作家の態度、布教傳道の使命教權と研究との對立、教外別傳の意義、宗教生活と道德生活、因に菊版、三一三頁、定價貳圓五拾錢甲子社書房發行

編輯後記

□大谷學報が大谷學會の研究機關雜誌であるから、從つて研究室に關係あるものが、編輯員となることが、全て便利であるとのことより、今度學生委員がかはることゝなつた。

□人文學研究室では石崎助手、哲學研究室では福井副手、佛教學研究室では、岸、北原兩副手等に決定。

□諸氏の奮鬪により、漸次「大谷學報」も發展學界に重きを加へるであらう。

(日暮)